

# イロイロ知りたい！ 心理学史

【第5回】

近代精神医療の開拓者・ピネルと  
描かれていない実践家・ピュッサン

サトウタツヤ



立命館大学文学部教授。歴史に埋もれていたピュッサンについてはあまり実像がわかりませんでしたが、今後、研究が進み、人物像が明らかになると思います。

(似顔絵イラスト：A. Tanimoto)

この人物は、フィリップ・ピネル(1745-1826)です。フランスの画家アンナ・メリメによって描かれた油絵です。この絵が描かれた時期はハッキリしませんが、1826年以前であることは間違いありません。



図1 フィリップ・ピネル



図2 ビセートル病院で患者を解放するピネル

フランス・ビセートル病院において、ピネルが左手で示した先には、左手に鎖をうたれた老患者がいます。その鎖がまさに切れようとしています。チャールズ・ミュラー(1815-1892)によって1840年代頃に描かれたこの絵は、精神医学の父と呼ばれるピネルの精神病患者解放の様子を表したものであるとして理解されてきました。

精神医学の歴史書には以下のような記述が見られると思います。「フランスの内科医・ピネルがビセートル病院において、世界に先駆けて、精神病患者の鎖を外して解放した。その時期は18世紀末である」

しかし、こうしたことは、現在では正確ではない、と信じられるようになってきました。次の絵を見てください。

この絵はトニー・ロベール＝フ

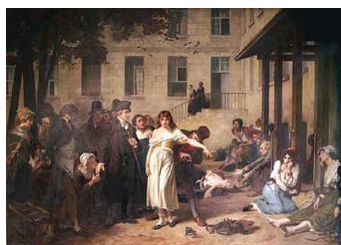


図3 サルペトリエール病院で女性患者を解放するピネル

ルリ(1838-1912)によって1876年に描かれたもので、フランス・サルペトリエール病院において女性患者の鎖を外すところを象徴的に描いたものです。

図3はピネルが女性患者のみを収容するサルペトリエール病院に移ってからのもので、女性患者を解放している図は、おそらく真実に近いものと思われています。

ピネルが精神医学に大きな変革をもたらした。そして精神病患者は解放された、という大枠は決して崩れることはありませんが、現在では、図3が真実に近い絵であり、図2は脚色が入っていると理解されています。

ピネルは1793年に、ビセートル病院長に任命され、ここでジャン＝バチスト・ピュッサンという精神障害者の施設で管理人をしていた人物に出会います。彼が行っていた処遇は、患者との生活に基づくもので、ピネルが行っていた道徳療法にも影響を与えたといえます。そして、鎖につながれて管理されている精神病患者の鎖を解き放ったのは、ピュッサンで、その年は1798年と思われています。

つまり、図2も図3もピネル

が精神病患者を解放している絵ですが、写実ではないのです。図3がピネルによる解放(1800)を表したもので、図2はピネルを神話化したものかもしれません。そして、ピュッサンという優れた実践家の業績が隠されてしまった可能性があるのです。

今回は、ピネルの業績について歴史的な観点から見直しがなされていることを紹介しましたが、医療としての精神医学におけるピネルの卓越さは色あせることはありません。そもそもこの当時は精神医学という語もなかったわけで、内科医としてのピネルが精神病患者に関心をもち、「精神病患者は罰すべき犯罪人ではなく、治療が必要な病人だ」という今日の認識がピネルの大きな業績によるものであることには間違いのないのです。

こうした業績は一人で成し遂げられたのではなく、ピュッサンという優れた実践家によって支えられていたと認識することも大事です。ただし、ピュッサン側から見ると、ピネルという優れた医師が赴任してきたからこそ、それまでの実践を活かして精神病患者を解放することができた、と述べることも可能なのです。

## 文献

ジャック・オックマン／阿部恵一郎(訳)(2007)『精神医学の歴史』白水社文庫クセジュ

図1～図3は、すべてWikimedia Commonsから引用しています。